

仮称:X場の正体は?(2)

渡辺 満 (静岡県)

§0 はじめに

前回の「仮称:X場の正体は?(1)」で紹介した実験を、さらに発展させているうちに、フリーエネルギーとして知られる、ヘンリー・モレイの装置やウイングート・ランバートソンのWINコンバータなどを、思わせる現象に遭遇した。

ある周波数で、ピンポイントに、X場の、はっきりした共振現象が現れた。

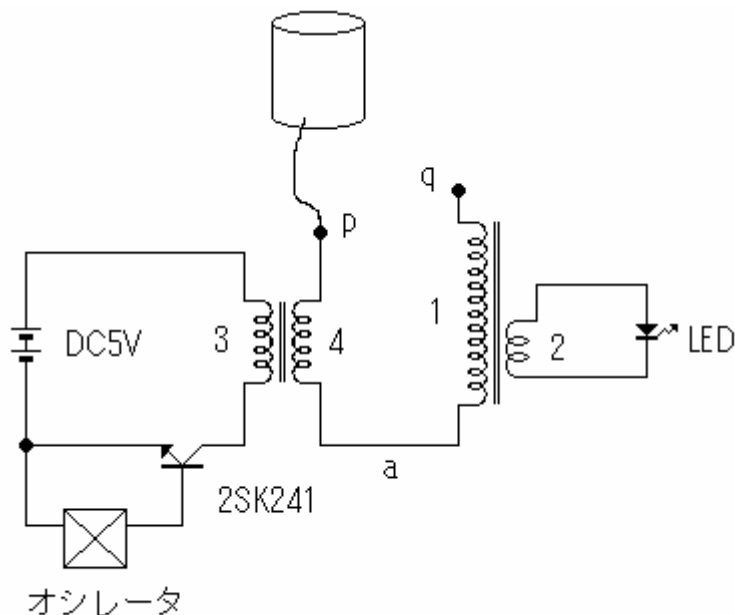
しかも、アンテナ(コンデンサ?)を付けると、それが強化する。

アンテナといえば、ヘンリー・モレイの装置やWINコンバータにも付いているから、似たようなものが起きたか? と思ってしまった。

言うておくが、これはラジオ受信機ではない。

「X共振,X粒子,X波,X流」という言葉を、X場の別表現として、適時使用することにする。

§1 コイルと回路



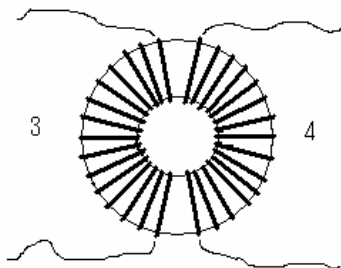
コイル1は、前回用いたものと同じで、34mmφ、長さ 200mm の極太フェライト棒に、0.8mmφのポリウレタン銅線を 10m(約 95 回)巻いたもの。

コイル2も前回と同じ、導線を輪状に 13 回巻いた簡単なもので、それをコイル1に通し、適当な位置に置いた。

コイル3／コイル4は、前はなかったが、これはトランスで、トライダル・コア(FT240)へ 0.8mmφのポリウレタン銅線を、各々1.8m(約 33 回)巻いてある。

これによって、コイル4側の電流は、両方向に振動するようになる。

(コイル3側は、1 方向にしか振動しない)



オシレータも MOSFET も、前回のものと同じである。

これらを用いて、上図のような回路を組んだ。

注目は、コイル1の端(点 q)はオープンにしてあり、他方のコイル4の端(点 p)には、アンテナとして、鉄製の空き缶(直径 10cm、高さ 15cm)を付けてある。

§2 X共振

さて、この状態で、オシレータから高周波電流を流し、周波数を変化させていくと、ある1点で、ピンポイントに、LEDが光る。(約4.2MHz)
他の点では、光らない。

前回の回路では、このようなピンポイント性は、現れなかったが、これが、この回路の特徴であり、このポイント(周波数)で、ぴったり、Xが電流に共振したのだろうと思う。

X共振である。

このようなピンポイント性が現れるのは、点 p,q をオープンにしたからだ。

ここが、謎なのであるが、

コイル4とコイル1の回路は、閉じてないので、電流はほとんど流れないと思うのだが、このポイントにおいては、なぜかLEDは光る。

試しに、図のa点に、抵抗を入れると、LEDは光らなかったので、確かに、コイル1に電流は流れているのだ。

実験では、アンテナを付けた方が、LEDは明るくなり、

さらに、アンテナ(鉄製の筐体)を大きくすると、さらに、LEDが明るくなった。

アンテナは、鉄のような導体でないと、うまくない。

アンテナを大きくすると、共振周波数が小さい方へずれた。

このアンテナだが、最初は、確かにアンテナのつもりだったのだが、そのうち、むしろコンデンサとして機能しているのではあるまいか? と思うようになってきた。

そうではあるが、まあ、アンテナと呼んでおくことにしよう。

この回路の実験において、常に付きまとうのが、その鋭敏さである。

ラジオ受信機などで、よく人がそばに立ったり、アンテナに触れたりすると、放送の入り具合が変化することがあるが、この回路でも、似たようなことが起きる。

例えば、このアンテナに手を近付けたりとすると、LEDの明るさが変化し、明るくなったり、暗くなったりする。

さらに、アンテナに手を触れると、LEDは消えてしまう。

どうも、ラジオよりも、こちらの方がもっと鋭敏でデリケートである。

なぜ、アンテナに手を触れると、LED が消えてしまうのか？
その辺りのことは、さらに実験を進めて判断したい。

さらに、おもしろいことが続々と現れているが、今回は、ここまでとする。

2013 年 5 月発行 V1.0

著者:渡辺 満, 発行者:渡辺 満

Copyright 渡辺 満 2013 年